

第3章

飛鳥宮跡の本質的価値と構成要素

第3章 飛鳥宮跡の本質的価値と構成要素

1. 史跡の本質的価値の明示

中国は、隋（581～618）による再統一により、版図は拡大した。都は大興城（現在の西安）である。続く、唐（618～907）の都は大興城を改変した長安城である。遣隋使・遣唐使が派遣され、これら都城や王宮について知見を得ていた。平城京が長安城を範としていたことはよく知られるところである。

さらに、7世紀の朝鮮半島は三国時代から、統一新羅時代にいたる。高句麗は、王宮と周辺の羅城で構成される平壤城に都をおいた。百済は泗沘（現在の扶余）に都をおき、扶蘇山城を中心とした王宮と周辺を取り囲む羅城で構成される。斉明天皇の時代、緊密な外交関係を結んでいた百済が滅亡し、その王朝の再興に努めたが、百済・倭の連合軍は白村江で破れた。新羅は金京（現在の慶州）に都をおき、不完全ながらも条坊制を施行した。

東アジア情勢が緊迫するなかで、飛鳥宮跡は、飛鳥時代の日本の政治・経済・文化の中心として機能した。Ⅰ期遺構は舒明天皇の飛鳥岡本宮、Ⅱ期遺構は皇極天皇の飛鳥板蓋宮、Ⅲ－A期遺構は斉明天皇・天智天皇の後飛鳥岡本宮、Ⅲ－B期遺構は天武天皇・持統天皇の飛鳥浄御原宮にそれぞれ比定される。明日香村岡の同一の場所に、宮の位置が固定されることとなったのである。それは、乙巳の変の舞台であり、古代最大の内戦である壬申の乱を経て天武天皇が即位し、飛鳥浄御原律令が制定された場所でもある。対外的に「日本国」・「天皇」号を発信したのもこの前後と推定される。

Ⅰ期の飛鳥岡本宮の段階では、建物方位も大きく真北から振れた地形条件に沿ったものであった。Ⅱ期以降の建物方位は、真北を指向した整然とした建物配置がとられた。屋根は在来の板葺・檜皮葺である。

Ⅲ－A期の後飛鳥岡本宮の宮殿には、内郭の北側に内裏にあたる天皇の私的空間（居住空間）、南側には政治・儀礼をおこなう公的空間が配置された。さらに内郭の南側には決して広くはないが儀礼をおこなうための砂利敷きの「庭」（広場）が広がっている。私的空間と公的空間が一体となった史上はじめての宮殿として意義づけることができる。

Ⅲ－B期の飛鳥浄御原宮では、内郭南東に大極殿に相当する大型建物とその周囲に大極殿院に相当する区画が設けられ、さらに政治・儀礼のための空間が設けられた。ただし、その南側には、難波宮にみられるような広大な「庭」と朝堂院などからなる政治・儀礼の場が設けられることはなかった。

それは、百済における宮殿立地の影響をうけ、飛鳥宮が丘陵に囲まれた防御性の高い立地をとっているためであり、その地形的な制約から、広大な政治・儀礼の場を設けることは実質的に不可能なことであった。

歴代の天皇がこの非常に狭いエリアの同一場所に政治中枢をおくことに固執したのは、東アジア情勢が緊迫するなかでの対外的な危機意識も起因すると考えられている。飛鳥宮跡の歴史的な重要性がここにある。そして、飛鳥宮跡の周辺では、各時期において様々な軍事的施設が設けられ、その防御がはかられた。しかし、その一方で、遣唐使や遣新羅使などをはじめさまざまな留学生・留学僧を多く含む外交使節が、飛鳥の地を訪れて盛んな交流が行われた。その饗宴施設が設けられ、飛鳥宮跡を中心に国際外交が展開さ

第3章 飛鳥宮跡の本質的価値と構成要素

れた。

その後の遷宮により、飛鳥宮跡の建物は失われた。さらに、中世には飛鳥宮跡は文字通り宮跡となって、主に耕作地に変わる。遺構は地中に埋もれることとなり、今日まで極めて良好に保存されてきた。飛鳥宮跡は見えなくなったが、往時も今も飛鳥の地を流れる“飛鳥川”を通して日本人の心の記憶として語り継がれてきた。

そして、近世には、宮跡の探索がおこなわれ、それに関わる伝承が残り、宮跡を訪ねる紀行文などが著された。飛鳥宮跡の位置は、板蓋宮跡と伝承されており、浄御原宮の所在地は石神遺跡周辺に想定されていた。ここまでの発掘調査によって、それぞれの宮の構造が前述のように判明しつつあり、今後もその調査・研究を継続していく必要がある。

飛鳥宮跡の特徴・本質的価値をまとめると以下の通りである。

①歴史上はじめて同一の場所に固定されて継続的に営まれた宮

舒明天皇の遷宮（630年）以降、持統天皇が藤原宮に遷宮（694年）するまでの間、継続的に明日香村岡周辺という狭いエリアで営まれた宮殿跡である。Ⅰ期遺構は舒明天皇の飛鳥岡本宮、Ⅱ期遺構は皇極天皇の飛鳥板蓋宮、Ⅲ-A期遺構は斉明天皇・天智天皇の後飛鳥岡本宮、Ⅲ-B期遺構は天武天皇・持統天皇の飛鳥浄御原宮にそれぞれ比定される。飛鳥宮跡は、同一の場所に宮の位置が固定され、継続的に営まれたものであり、そのことが判明した最も古い事例である。

②古代律令国家成立への道のりを示す宮の構造

宮殿の構造は、当時の最高権力者の国家形成の思想を反映しており、飛鳥宮跡に含まれる宮跡の実像解明は古代の国家形成過程の政治システムの解明を意味する。このうち、飛鳥宮跡Ⅲ期の遺構は、後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮は内裏にあたる居住空間（私的空間）と正殿・大極殿に相当する大型建物（公的空間）からなる構造が判明している。さらに大型建物に隣接する「庭」（広場）があり、大型建物と「庭」で政治・儀礼が舉行された。公的空間と私的空間が宮の構造のうえで確認された最も古い事例である。また、宮殿建築は、中国・朝鮮半島の古代宮殿とは異なり、建物は全て掘立柱建物であり、屋根は瓦を用いず、檜皮葺・板葺とするなど、在来の文化的伝統の姿を示すものである。

東アジア情勢が緊迫するなかで、飛鳥宮跡は防御的な立地をとったが、その一方で国際外交の中心であり、渡来文化を吸収しながら、在来文化と融合することにより、古代律令国家成立への道のりを歩んだことが、飛鳥宮跡から跡づけることが可能である。

③歴史的・文化的景観と一体的にある宮跡

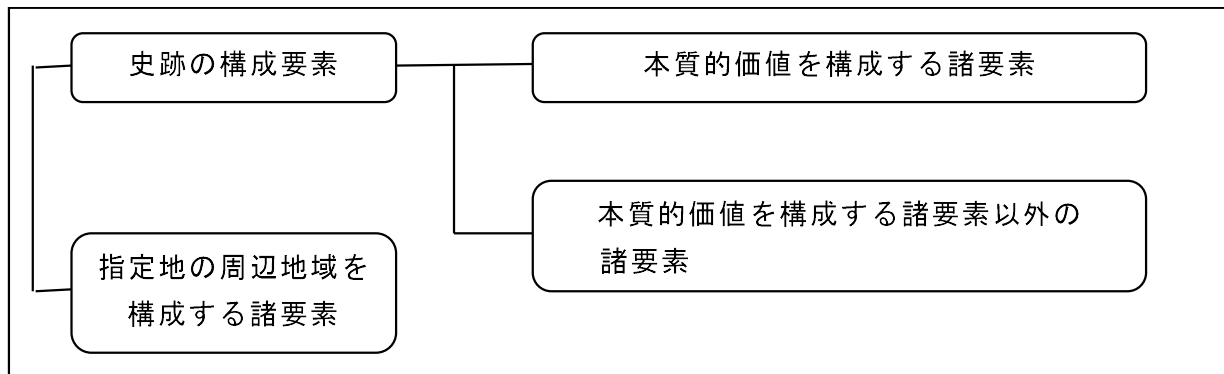
地下の遺構は宮が廃絶した状況のまま埋没した。当時の地形や宮が廃絶して以降の地域の歴史を物語る各種の文化財、さらに現在の自然景観や田園風景と一体となって宮殿の遺構が保存され、継承されている。古代の宮殿の中でも保存状態が良い希少な例である。

④周辺の諸施設の中心として機能した宮跡

飛鳥時代には、飛鳥宮跡を中心に飛鳥地域全体で都を構成する諸施設が造営された。飛鳥宮跡の北東には飛鳥京跡苑池（庭園）が付属しており、宮外には飛鳥水落遺跡（漏刻）・石神遺跡（饗宴施設）・酒船石遺跡（祭祀施設）・飛鳥池遺跡（官営工房）・飛鳥地域の諸寺などの様々な施設が有機的に密接な関わりをもって造営されている。

2. 構成要素の特定

本史跡の価値を踏まえ、飛鳥宮跡の構成要素を以下に整理する。



(1) 本質的価値を構成する諸要素

① 飛鳥宮跡の遺構

飛鳥宮跡においては、発掘調査によって歴代天皇の宮殿に関わる建物跡、塀跡・溝などの区画施設、石敷、井戸などの遺構が検出されている。

飛鳥宮跡では、古代国家の中核である歴代天皇の宮殿そのものが本質的価値を構成する要素である。宮殿に関わる遺構がその諸要素であって、宮名を比定して、遺構の性格を究明するとともに、それぞれの宮殿の構造を解明する必要がある。

最下層で検出された **I 期遺構** は、舒明天皇の飛鳥岡本宮（630～636 年）にあたりと考えられる。以来、現在の明日香村岡一帯で継続的に宮殿が造営された。上層遺構の保護のために調査箇所が限られているが、建物跡をはじめ塀跡、石敷、石組溝などが確認されている。飛鳥川の流れる方向に沿うように、地形にあわせて北で西に約 20 度振れるのが特徴である。柱穴から大量の焼土や炭が検出されており、636 年に飛鳥岡本宮が焼失し、舒明天皇は田中宮に遷宮するが、その記事と一致する。

II 期遺構 は、皇極天皇・斉明天皇の飛鳥板蓋宮（643～645 年、655 年）にあたりと考えられる。板蓋というのはそれまでの宮殿の屋根が檜皮葺などであったのを板葺きにしたことによるものとみられる。III 期遺構の下層にあるため、遺構の詳細は不明であるが、I 期遺構を造成し、建物・塀など方位を真北に揃え造営された。宮殿を区画する塀と溝による回廊状の大きな方形区画が確認されている。東西約 190m、南北 198m 以上を計り、後の III 期の内郭よりも規模が大きく、東の山寄りに位置する。

645 年、この飛鳥板蓋宮において、中大兄皇子と中臣鎌足によって、蘇我入鹿が暗殺された（乙巳の変）。直後に孝徳天皇により、難波長柄豊埼宮に遷宮された。そののち皇極天皇が重祚した斉明天皇は、655 年にこの飛鳥板蓋宮で即位した。同年に火災で焼失し、後飛鳥岡本宮に遷宮した。

III 期遺構 は、内郭とその南東にあるエビノコ郭（小字名「エビノコ」より命名）、内郭とエビノコ郭を取り囲むようにしてある外郭で構成されている。この III 期遺構のうち、III - A 期が後飛鳥岡本宮、III - B 期が飛鳥浄御原宮にあたりと考えられる。

第3章 飛鳥宮跡の本質的価値と構成要素



図 3-1 飛鳥宮跡の変遷

(出典：明日香村「飛鳥宮跡保存活用基本構想検討報告書」H26.3)

表 3-1 飛鳥諸宮の移り変わり

天皇	天皇正宮					その他の宮					年表			
	飛鳥以外の宮			飛鳥諸宮		飛鳥以外の宮								
	豊浦宮	小墾田宮	百濟宮	飛鳥岡本宮	飛鳥板蓋宮	後飛鳥岡本宮	飛鳥浄御原宮	飛鳥河辺行宮	飛鳥川原宮	耳梨行宮		田中宮	厩坂宮	嶋宮
推古 (592~628)	592													592 推古天皇即位
														593 厩戸皇子摂政となる。飛鳥寺の塔心柱を建てる
														600 第1回遣隋使派遣。新羅討伐軍を派遣
														603 冠位十二階を制定
														604 憲法十七条を制定
														607 小野妹子らを随に遣わす
														608 小野妹子、答礼使裴世清を伴い帰国
														609 飛鳥寺本尊(飛鳥大仏)完成
														610 高句麗僧曇徴来朝し、紙・墨の製法伝来
														(618 隋が滅亡し、唐が建国)
													620 厩戸皇子と蘇我馬子が天皇記・国記等を編纂	
													621 厩戸皇子没	
													626 蘇我馬子没	
													628 推古天皇没	
舒明 (629~641)				630										629 舒明天皇即位
				630										630 第1回遣唐使派遣(犬上御田鎌)。飛鳥岡本宮に遷宮
														639 百濟宮・百濟大寺(のちの大安寺)を造営
														641 舒明天皇没
皇極 (642~644)														642 皇極天皇即位。小墾田宮に遷都
														643 蘇我入鹿、山背大兄王を襲い一族を殺害
														645 中大兄皇子ら蘇我入鹿を誅滅し大化改新始まる。難波長柄豊碕宮に遷宮
孝徳 (645~654)														
														654 遣唐使派遣(高向玄理)。孝徳天皇没
斉明 (655~661)														655 飛鳥板蓋宮で斉明天皇(皇極)重祚
														656 後飛鳥岡本宮に遷宮
														658 有間皇子処刑される。阿部比羅夫蝦夷を討つ
天智 (662~671)														661 斉明天皇没。中大兄皇子称制
														663 倭・百濟連合軍白村江で唐に大敗する
														668 天智天皇即位
														669 藤原鎌足没
														671 天智天皇没
弘文(671~672)														672 壬申の乱
天武 (672~687)														673 飛鳥浄御原宮で天武天皇即位
														680 薬師寺建立
														681 飛鳥浄御原令の編纂開始。
														684 八色の姓を定める
持統 (686~697)														686 大津皇子処刑される。鸕野讃良皇女(持統天皇)称制
														689 飛鳥浄御原令を制定
														690 持統天皇即位
													694 藤原宮に遷宮	
														697 持統天皇譲位。文武天皇即位

(出典：明日香村「飛鳥宮跡保存活用構想検討報告書」H26.3)